

---

# GLUTTONS!

琳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GLUTTONS！

### 【Nコード】

N3497Y

### 【作者名】

琳

### 【あらすじ】

私、神崎りつは学校から帰る途中に、どうやら異世界に飛ばされてしまったようです。元の世界には、もう戻れなくても構わない。・・・・ん？もしかして、これは召喚ってやつですか！？勇者の件なら任せて下さい。おいしいご飯とふかかなベッドを確保してもらえるなら喜んで！・・・と思ったら、召喚の間じゃなく広大な草原に。ここどこだよ！？

容姿、成績共に平凡で、取り柄といったら脚の速さの私が、かつ

こいいのどこか抜けてる勇者とグルメ旅、もとい世界を救う旅に出る！

## こたつといえばみかん（前書き）

初心者なので生温い目で見てやってください。コメディ感をうまく出せるよう頑張り、マス。

## こたつといえばみかん

それは何の変哲もない、寒い冬の間のとある一日になる予定、だった。

一昨日や昨日と変わらない、今日と明日の違いは日付だけなんていうような、そんな普段通りの日。

「さみー……………」

鼻をズズツと嚙りながら、私はいつそう深くポケットに両手をつ込む。

ホッカイロを持って学校に行くべきだったと後悔した。ちなみに私は断固貼らない派である。

「まあでも、もうちょいで家着くし」

通りに誰もいないのをいいことに、独り言を続ける。

いつものようにだらだらと授業を受けて、数少ない友人の一人と昼ご飯を食べて、午後の授業が終われば即下校した。

もう、部活には入ってないので今は大手を振ってご帰宅の途中である。

（家帰ったらこたつでぬくぬくしよう）

うへへ、と緩んだ笑みを浮かべる。

と、冷たい風が吹きつけて私はウツと呻いた。

寒い。特に太股が辛い。辛すぎる。

女子高生のおみあしになんて仕打ちを！貴様、断じて許さん！

と、心の中で自然の脅威に立ち向かってみる。

ザアアツ。

私の心の声が聞えたのか、いつそう強く風が吹く。

「うひゃあ」

間抜けな声をあげて私は風を睨みつけようと・・・・・・・・クソ、睨めない！

そんなバカなことをしている内にも、風は強く吹きつけてくる。道端に寄せられていた落ち葉が舞い上がり、木々が風でザワザワと鳴った。

風力強すぎじゃね！？スカート押さえるので必死なんですけど。

両手でスカートを押さえ、私はローファアの先をじっと見つめた。正確には、足のついていてる筈の地面を。

（沈んでる・・・・・・・・？）

見慣れた硬質のアスファルトが、ぐにやりとひしゃげたような気がした、途端。

地面が消失した。

え。

なに、なんで。

どうして。

「ええええええういんがーであむれびおーさああああああ  
イヤアアアアアー！！！」

・・・・・・・・とつさに本で読んだ呪文を唱えてみたけど、ダメでした。

## こたつといえみかん（後書き）

異世界ものを書くのは初めてなので、読んでいて気になる点などがありましたら、知らせて頂けると助かります。

にゅうはくしょくといえはおんせんのもと

耳元で唸っていた風の音が、ふつと遠ざかる。

同時に見慣れた景色が瞬く間に色褪せて、あたりは何も無くなった。ただただ、どこまでも乳白色の世界に私はいた。

くんくんと匂いを嗅いでみたが、何の匂いもしない。

「なに、これ」

乾いた声が咽喉から零れる。状況を把握しようと、私は必死に頭を働かせた。

その一、夢を見ている。

「一番あり得るな、うん」

その場合、いつから夢だったんだろうか。

学校に行ったのも夢？

それとももつと前……だったら、いいのに。

「……考えても仕方ないか」

そう呟いて私は頭<sup>かぶり</sup>を振った。

その二、……。

どうせ、その一だろうけど。

もしかしたら、ひよつとして。

「い、異世界に飛んじやってたりして」

ちよつとだけわくわくした声だったのは気のせいだ、うん。

『おお……！あなたがこの世界を救ってくださる勇者様なのですね』

みたいな！すごい美少女に感謝されちゃったりね！美形騎士と魔王を滅ぼす旅に出ちゃったりね！



「うへへ」

夢なのをいいことに、現状把握を放棄して思いっきり妄想してみる。勇者なので丁重に扱われ、美味しいご飯とふかふかなベッド、つまり高級な宿！

いくらネットに溢れている異世界モノだって、そんな都合の良い世界は無いだろうけど。

妄想の翼は自由に羽ばたくのだ！（キリッ

おっと、よだれが・・・・・・・・と口を拭きかけた時、突然身体が落下した。

「うあっ!?!」

いきなり体重増えた!?! いやいやそんなバカな・・・・・・・・間食減らそう。

やみくもに手足をバタつかせてみたが、何も変わらない。落ちていくという感覚はあるものの、辺りは相変わらず乳白色である。

何故か自分の手や制服はクリアに見えるけど。  
温泉の素みたいだな！

・・・どのくらい経ったのだろうか。

「まだかなー・・・」

私は相変わらず落ち続けていた。

落下速度は徐々に緩やかになり、今はたんぽぽの綿毛が地面に落ちるのより少し速いくらいのスピードである。安全運転、大事ですね。不思議の国のアリスに、こんな場面があった気がする。

私もイスが欲しい！

ここに来るまでに持っていた鞆の中に読みかけの小説が入っていたから、あれがあれば退屈しないんだけどなー。

「うーん」

「あー、あああー」

「ざーんこーくなてっんしの・・・」

暇です。すべくたくる暇です。

トイレ行きたくなりませんように。あ、考えると行きたくなるからダメだ。

「うおりゃっ」

考えを紛らわそうと、落下しながら準備運動が出来るかどうか試してみた。ダイエットになるね！

「いっちにーさんしー・・・」

結論。しゃちほこは無理でした。

肩入れとか屈伸は出来たけどね！カロリー消費DA ZE

そんなこんなで？時間を潰していると、一筋の光が雲の切れ間から溢れてくるように私の足元から上ってきた。

どのくらい下から照らしているのか解らないが、ゆっくりとその筋は広がってくる。

やがてその輝きが全身を包み、私は眩しさにまぶたを瞑った。  
トンネル  
異空間を抜けたら、別世界だった、なんてことももしかしたらあるかもしれない。

その際は勇者オプションで色々贅沢出来ますように！

そんな不埒な願いを抱きながら、私は光の奔流に呑み込まれたのだった。  
。

だいしぜんといえはたき（前書き）

ついに他の登場人物がでます。

だいしぜんといえばたき

まぶた越しでも、静謐な光を感じる。

正視する事の出来ない白光がしばらくの間私を包み込んだ。

．．．．．どのくらい経っただろうか。

数秒とも数時間とも判別のつかない『時』は、わずかな変化によって終わりを告げた。

網膜に伝わってくる光の種類が変わったのだ。

白妙から、懐かしい赤黄色へと。

それは陽射しだった。確かに感じる、太陽の存在。

私は喜び勇んで目を開き、．．．．．え、みどり？

何この全てみどりっ

ドサッ。

「あぐふっ！」

腰から頭のとっぺんを貫く衝撃に、私は息をゴホッと吐いた。

簡単にいえば尻もちをついたのである。

「っ痛たた・・・っ」

若干涙目になりつつ、視線を前にさだめると。

・・・見渡す限りの大草原が広がっていた。思わず言葉を失う。

青々とした緑野を、ビュウツと心地よい風が吹き抜けていく。

肩まで伸びた私の黒い髪も風で舞い上がった。

「うわぁ・・・」

驚きで涙も引つ込んだ。何これパネエ。

しゃがみ込んでいるせいかもしれないが、辺りには家一軒見当たらない。どこまでも、生鮮な緑草が風になびいているのが見えるだけだ。

キャパシティオーバーした私は、座り込んだまま口を半開きにしておいて、ポカンと大自然を眺めていた。

徐々に、思考能力が回復してくる。

どゆこと。

どういうこと。

まさか本当に、異世界？

「おい」

不意に、背後から低い声が聞えたのはその時だった。

ビクツとして後ろを振り向く。

目に入ったのは人の脚だった。

いい脚してそうだなー。

つつい癖で筋肉のつき方などを観察してしまう。

茶色いだぼつとしたズボンを穿いているせいでよくは解らないが、引き締まった筋肉を持っているようだ。

そのまま視線を上へ持ち上げていく。

少し汚れた木綿っぽいシャ、ツつて・・・・・・・・ん？  
なんか。

剣みたいなものが腰に引っ掛けてあった、ような。  
ぎこちなく目を下へ戻す。

平和を掲げる国の民としては、アニメやマンガでしかお目にかからないそれを、しっかりと我が目で確信し、私は大声をあげたい衝動にかられた。

ええええええ！！なにこれ！！いや剣だけど。剣だけさあ！

「おい」

再び声をかけられ、反射的に上を向く。

すると射抜くような鋭さを持った深緑の眸と、ぱっちり目が合ってしまった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

第一村人？発見です。

## 「えんをたいせつに

原っぱのまんなかで、剣を持ったに ちゃんに出会いました。  
黙って睨み合っていて仕方ないので、挨拶する。コホン。

「こんにちは！」

「・・・・・・・・ふもとの町の人間か？」

私の勇気を振り絞った挨拶がアア！お主・・・・・・・・なかなかやるな。

って、そんなことより、あの。

今更なんですけど。

「ここ、どこですか？」

異世界だったりしますか？

「・・・・・・・・」

男の形の良い眉が訝しげに寄せられる。さっきから思っていたけど、イケメンだな！

私の茶色の混じった黒髪とは全く違う、鴉の濡羽色の髪。長さは耳が隠れるくらいだ。

すらりと通った鼻筋の下には、薄い唇が閉じられている。

ひとつひとつのパーツは首尾よく顔に収まっている。が、眉をしかめているせいかやたら怖そうに見える。つか怖い。

「アルフェニア王国だ」

へー。あるふえにあ。どこぞのウサギさん家族を彷彿させる名前だ。いや、そんなに似てないか。

っていうか、やっぱりここは異世界か。

そうかそうか。ほおお。

「ここはレバノンという町の近くの草原で、」



「つざけんなあああ！！！！」

説明を続けようとしてくれた彼の言葉を遮ったのは、質問した張本<sup>わた</sup>人<sup>し</sup>だった。

「おいおいおいおい異世界トリップっていったらセオリーは召喚の間だろそれがなんでこんな大草原に放り出されてんの私！？誰だ呼び出したのは下手くそな術使いやがって位置の特定が出来てないだろうが……」

私の美女とおいしいご飯を返せえええええ！

魂の叫びは、澄んだ風に運ばれていった。ノンブレスで言ったせいで、呼吸が多少乱れる。

息を整えたのち、ハツと我に返つて青年の方を見ると、無表情のまま固まっていた。あれ、さつきより距離が広がつてませんか？

「あ、すみませんちよつと取り乱しちゃって」

あはは、と愛想笑いをしてみせる。

と、にーちゃんが少し近寄って膝を折った。さつきよりも顔が近くなる。おお、近くで見てもいい男。

彼は少し逡巡した様子を見せた後、私にゆっくりと話しかけた。

「ふもとに病院があるから、一緒に行こう」

「私は大丈夫です!!」

なんてことだ、危ない人認定されていたとは。

力いっぱい否定する。

「心配するな、酷い事はしない」

「だから大丈夫だってば!？」

お願いだから気の毒そうな目で見ないで下さい。

誤解を受けるような真似をしてしまったのは私だけど、傷つく！

「あの、違うんです」

私は慌てて両手を振る。

「私、この世界の人間じゃないんです」

「……うん、言葉の選択間違えた。」

もう強引に病院まで引きずられるんじゃないか、と及び腰で彼に視線をやると、意外にも難しそうな顔で考え込んでいた。

しばしの間、草が揺れる音だけが空間を支配する。

「……俺はさっきまで、この草原にひとり立っていた」  
彼はおもむろに口を開いた。

「気配はなかった。だが、お前は突然俺の前に現れた」

まるで、うえから落ちてきたかのように。

じっとダークグリーンの瞳に見据えられ、私は動けない。

緊張で喉がコクツと鳴った。

「さすが異世界人だな」

「……」

「えっ、信じるの？」

いや、疑われても困るけど。

ただどあんまりにもあっさり目の前の彼が納得したので、返って心配になる。

「信じるも何も……別の世界から来たんだろ？」

若干首をかしげるにーちゃん。

「う、はい」

「じゃあ、そうなんだろ」

面白い服を着ているな、と相変わらずの真顔で言う男に、私は拍子抜けした。

普通信じないだろ。と思いつつも、この世界において異分子である私を認めてもらえた事に安心したのも事実だ。

帰りたいなんて気は起きない。

あの世界に戻りたくない、ない。

「信じてくれてありがとうございます。私は神埼りつといいます」  
草を掃って立ち上ると、一礼して名を名乗る。

「……ところで、私今何語しゃべってますか？」

絶対日本語じゃない気がするよ！

彼の名はギイ・アルゴスといった。

ちなみに私達はこの世界の共通語である、ファールド語とやらを使って会話しているらしい。わー私ってバイリンガル！

一通り自己紹介をした。ギイはひとり旅をして世界を周っているらしい。何が目的なのかは言わなかったので、私も訊かないでおく。

「ところで、リツはこれからどうするんだ？」

町まで送ろうか、と言ってくれたギイに私はにっこり笑った。

「ええ、あなたと一緒に旅をしようと思います」

深緑の目が大きく見開かれる。

ここで会ったのも何かの縁。日本人は人とのつながりを大切にするのだ。

「……まあ本音をぶっちゃければ、心細いので逃がしませ  
ん！とゆーことです。」

おねがいはいじょうずにやりましょう

あなたと一緒に、旅をしようと思います。

そう私が告げると、何故か彼は固まってしまった。

青い野原にビュウツと風が吹く。

「…………お、俺と旅を？」

困った表情をしているギイ。

しかしここは、押して押して押しまくるしかない！

「はい。…………いきなりこの世界に来たばかりで、右も左もわからないですし、みんながあなたみたいに信じてくれるとは限りません…………。心細いんです、どうか一緒に連れて行って下さい！」

胸の前で両手を握り締め、目をうるうるさせて懇願する。

必殺、父にお小遣いを強請る。の応用版だ。

乙女のお願ひ（笑）に、表情を変えないギイ。…………あ、よく見ると冷汗垂らしてる。

「しかし、俺は危険な場所に行ったり」

「足手まといなのはわかってます！でも、なるだけ迷惑かけないようにするので…………ダメですか？」

わざと断りにくい空気を作り出す。

すると、ギイは深いため息をひとつ吐いた。

「男と二人きりで旅する事になるんだぞ。若い女性には辛いだろうかいのか？」

真剣な色を帯びた鉄色の双眸が私の顔を覗き込む。

私はその目を見つめ返し、きっぱりと言った。

「構いません。ギイさんからしたら私なんてガキでしょうから、間違っても起こらないに決まってるですし」

だってこのにーちゃん、最低でも二十歳は超えていそ<sup>はたち</sup>うだ。

その答えを聞き、ギイが少し訝しげな顔になった。

「お前、俺をいくつだと思ってる？」

「え？二十超えてますよね」

みるみるうちに彼の表情がドーンと暗くなる。

あれ？

「・・・・・・・・・・なんだ」

「えっ？」

ボソツと彼が呟いた言葉を拾えず、訊き返すと。

「十七だ！」苛立ちの滲んだ返事が返ってきた。

「マジで!？」

ひとつしか変わんないじゃん！

驚愕すると、ますますギイの顔が暗くなる。

こ、これはまずい。早急にフォローが必要だ。

「あら、とっても凛々しい顔立ちだし、雰囲気も落ち着いてるから勘違いしちゃいました!」

内心ダラダラ汗を掻きながら笑顔で褒めてみる。

「・・・・・・・・別に、無理しなくていい」

どこか拗ねた口調でそっぽを向くギイ。

「歳も近くて心配だろうから、やはりふもとの町で、」

「お願いします!!せめてこの世界に慣れるまでは一緒にいさせてえええ!!!」

必死の形相で彼に近寄った。

ここで手放してなるものか。

それに、あんなにあっさりと事実を受け入れてくれた彼に興味がある。

このままお別れしてしまうのは、何となく惜しい気がするのだ。

「大丈夫です心配なんてこれっぽちもしてません！だからっ、ね！？」

ググ、と彼の目を見つめる。

「わ、わかったから。そんなに詰め寄るな」

若干逃げ腰になりながら、彼はようやく頷いてくれた。

「ありがとうございます！！」

ターゲット確保成功です！

「では、改めてよろしくお願いします、ギイさん」

適度な距離を置いた後、そう言って手を差し出す。

「ギイでいい。あと、敬語も止めてくれ」

ギイ曰く、共に旅をする相手に敬語を使われたら、気が休まらないとのこと。

「わかりました、じゃなくてええっと、わかった」

正直丁寧な言葉遣いとか苦手なので、その申し出はとても有難い。もう一度言いなおす。

「これからよろしく、ギイ」

「ああ、よろしく頼む」

握ったギイの手は大きくがっしりとしていて、堅いまめが何個か出ていた。

異世界に来て一日目。

私はこの親切な彼が一体何者なのかということに、全く気付いていなかった。



おねがいはいじょうずにやりましょう（後書き）

もう少し一話一話が長いほうが良いかな？書いていて少し悩めます。



くうぶくはちいじうのすぱいす（前書き）

一応残酷描写付けました。

くつふくはさいごうのすばいす

ギイの旅に同行することが決定し、私は元気よく声を張り上げた。  
「ではっ、出発！」

「……どこ行くんだっけ？  
チラッ、とギイを見る。

「レバノンに向かう。そこでお前の服も揃えられるだろう」  
あと、靴も。

彼の視線がローファーに寄越される。  
確かに、この靴歩きにくいんだよなあ。

ちなみに彼の靴は、しっかりした造りの黒い革のブーツだった。登山に便利そうですね！

ギイが地面に置いてあったザックを拾い上げる。私は手ぶらだ。  
わーい！アッハハ、鞆どこ行っただんたろ。

「よし、行くか」

「うん！」

何はともあれ、出発です！

おおよそ6時間後。

私達は草原を抜け、森の中に入っていた。  
ここを抜けた先にレバノンという町があるらしい。草原から歩いて

約半日程の距離とのこと。

ギイ曰く、「近い」。

しれっと真顔で言っていた。何この人怖い。

ごろごろ石が転がっている道を、先頭のギイが迷わず歩いていく。  
「・・・・・・・・っ」

少しずつ呼吸が乱れてきた。ここ最近ろくに運動していなかったツケが、体力とおなかの肉に回ってきている・・・・・・・・ちいいつ。

一旦立ち止り、膝に両手をおいて呼吸を整えた。

「休憩するか」

少し離れた所からギイの声が聞え、私は頭を横に振る。

「大丈夫、すぐ追いつく」

その体勢のまま視線を前へ向けると、彼は暗くなった空を見上げていた。

木々の隙間から見える上天は、夕暮れから紫黒の深い闇へと変わってきている。

「あと少し距離を稼いだら、今日は終わりにしよう」

じきに道が闇に覆われてわからなくなる。そう言葉を続け、ギイが歩き出した。

私も姿勢をしゃんとして踏み出そうとする。

背中が、ゾクリとした。

反射的に身体が動き、私は横に飛んだ。

「リッ！」

ギイが駆け寄り、私の前に立つ。

彼の背中越しに、さっきまで私が立っていたところが見えた。土が深く抉られている。

「グウウル・・・・・・・・」

唸り声が張り詰めた空間に響いた。狼によく似た獣が、毛を逆立て

てこちらをねめつけている。

ギイがすらりと剣を抜き、刃が冷たく光ったのが見えた、途端。

ザンツ。

獣が倒れ込んでいた。

もうピクリとも動かない体から流れ出す血が、土に染みていく。

暗がりの中で赤い液体を見つめていると、私の中にも何かが染み込んできた。

それは、これまで本当には感じていなかった現実感。

どこか浮揚していた気持ち、重みを持ってズドンと落ちてくる。

……ああ、ここは。

本当に、私のいた世界じゃないんだ。

ふと家族の顔が思い浮かんで、シャボン玉のように淡く消えた。

「よく避けたな」

ギイの声で私はハッと我に返った。

「なんとなく、ね」ぎこちなく笑う。

「動くのが遅れて悪かった」

顔をしかめてギイが謝るのを、私は慌てて否定する。

「そんなことない！助けてくれてありがとう」

彼がいなければ、死んでいただろう。

すると難しい顔をしたまま、ギイが獣を覗き込んだ。

「……よし、食おう」

「食えんの！？」

えええええ！！

ちよつとシリアスだった空気がぶち壊しです、いや、いいんだけど。

木の根元まで獣、（カルというらしい）を引きずっていき、火を起す。

そこら辺に散らばっていた乾燥した枝を放り込むと、炎が赤々と燃えあがった。

「おお・・・あつたかい」

ギイはカルの解体作業中だ。

カルは雑食で、気紛れに旅人や他の動物を襲って食べることもあるが、基本的には木の実や草を食すので肉が柔らかいらしい。

正直、大丈夫なのか？と思っていたので、ちよつと期待が高まる。ウヘヘへ。

ギイが切り分けた生肉を小枝に突き刺し、火で炙<sup>あぶ</sup>っていく。しばらくすると、香ばしい香りが辺りを漂い始めた。

「食べ頃だな」そう言うときギイが肉にかぶりついた。

「いただきます」

私も匂いに惹かれてカルを口にした。

味付けをしていない分、口の中に肉の旨味<sup>つまみ</sup>そのものが広がっていく。

ちょうど良い焼き加減が、硬すぎない肉にピッタリだ。

「口に合うか？」ギイが小首を傾げる。

「うまい！すごいうまい」

満面の笑みでそう返事をするとき、ギイが満足そうに頷いた。どんどん食え、という彼の言葉に甘えて、次に手を伸ばす。

「火傷するなよ「アツツ！・・・」

「・・・くひのなががいひゃい。

「お前、バカだろ」

半目になったギイに、私は何も言い返せなかった。なぜって、肉で口の中がいつぱいだったからね！べっべつに、本当の事だから言い返せなかったとかじゃなんだから！

ギイと2人で美味しくいただいたが、流石にまるまる一頭は食べ切れなかった。

そのままにしておくのと獣が寄ってくるので地面を掘って埋めておく。ごちそう様です。

たき火は交替で見張ることにした。トップバッターは私だ。

真っ暗な森の中で、炎のまわりだけが明るく照らされている。

火の気が弱まりそうになったので枝をくべていると、ふぁ、と欠伸がでた。

たき火の向こう側で寝ているギイの後頭部を見つめる。

規則正しい呼吸が聞え、ひとりではないという事実を再確認してホツとする。

親切な人だなあ、としみじみ思った。迷惑ばかりかけているのに、嫌な顔一つせずにいてくれる。

「私、ヒモじゃん」

まづくね？

何ていうか、人として！

自分にできること。役に立てる、なにか。

それを早く見つけたいと思った……切実に。

「ま、とりあえずは火の番だな」

んー、と伸びをして、ポイツと葉の付いた枝をくべる。パチパチと火がはぜ、真っ赤な火の粉が闇に踊った。

2時間ほど経った頃、ギイを起こす。そろそろ交代の時間だ。ギイ、と呼びかけると、本当に寝てたのかと疑うくらいスツと身を

起こした。

「交代の時になったら起こしてね」

そう言って彼の貸してくれた灰色のマントに包まって横になる。  
慣れないことづくめで疲れていたせいかな、私はあつという間に眠りに引き込まれていった。

くっふくはさいこうのすばいす（後書き）

評価やお気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます！  
^^やる気が湧きます。



さかなはやっぱやきたい

何かが聞える。澄んで美しい爽やかな声。

「・・・・・・・・い」

ああ、鳥の鳴き声だ。ピーーと高い音で鳴いている。

「おい」

目覚めには最高の朝だね、って、うん？

「おいっ」

朝？ASAですか？

「起きろ！」

耳元で大きく叫ばれ、私はバツと身体を起こした。

「ようやく起きたか」

私の脇で、ギイがほっとした表情を浮かべている。

「・・・・・・・・おはようございます？」

「おはよう」

疑問形の私の挨拶に、普通に返してくる。

上を見上げれば、木々の間から洩れてくる朝陽。

全身に残っている、よく寝た後の満足感。

「・・・・・・・・結論はひとつです。」

「ごめんなさい寝過ぎましたああああ！！」

おそらく見張りの時間になっても起きなかったのだろう。私のバカバカクソバカ野郎！

ジャパニーズ土下座を披露しようとする、ギイが慌てて私を止めに入った。何か嫌なものを感じたらしい。

「いや、お前があまりにも気持ち良さそうに寝ていたから・・・・・・・・俺が起こさなかった」

所在なさに自分の黒髪を右手で掻き回しているギイに、私は詰め

寄った。

「ギイさああん!!」

「ザ、と座ったまま下がろうとする彼を気に留めず、私は主張する。

「それじゃほんつとうに私がただのお荷物になるじゃん!」

「に、にもつ?」当惑した表情のギイ。

「そうだよ、ヒモだよヒモ!」

ヒモ……と呆氣にとられた彼に私はまくしたてた。

「私が出来ることなんて今は特に何も無いんだから、せめて私にも出来ることはやりたいの!だからどんなに気持ち良さそうに寝ても、これからは叩き起こして下さい」

「そうだ。私にしかできない事なんて、この世界ではまだ何も無い。

それは、向こうの世界でも同じだったけど。

「ヒモは嫌だ……」

だからこそ、出来ることはしたい。

俯いた私の上から声が降ってきた。

「わかった。俺もお前を子供扱いしないよう気を付ける」

こどもあつかいて。

私、ガキだと思われてたの!?

ええー、とギイさんを見上げると、いたって真剣なお顔。  
ある意味、ヒモより切ねえ……。

爽やかな朝の陽光が射し込む中、私は「オ、オネガイシマス……  
……」と彼に頭を垂れたのだった。

野宿した場所を離れてから2時間程経った頃。

私達はようやく森を抜けたところに流れていた川で食事を取ることにした。

「長くてなるたけ真つ直ぐな枝を2本持ってきてくれ」とギイに言われ、森の入口でそれらしい枝を探す。

「お、これ良くな」

見つけた枝を振り回しながらギイの所へ戻ると、彼はザックから取り出した細い縄をほぐして、更に細い紐へと変えていた。

「はい、持ってきたよ」

「すまない」ギイは枝の先に細い紐を結び付ける。・・・・・・綺麗な指してますね、おにーさん。羨ましいなオイ。

完成したものを見て、私は声を上げた。

「釣り竿だ！」

どこから見ても、正真正銘の釣り道具である。

餌はどうするんだろ？と彼を見ると、荷物をゴソゴソして干し肉を取り出した。

小さく引き裂いて、糸の先に付ける。

緩やかな流れの川にそれを投じると、あとは2人して獲物がかかるのをのんびり待つだけとなった。

数分後。

ピクピクツ、と糸が引つ張られる感覚。

「キター！」

思いっきり引くと、水上に魚が跳ねあがった。

そのまま地面へと落ちる。

「獲れたよー」ギイに自慢すると、ギイが不服そうに自分の釣り竿を眺めた。と、糸が水の中に引き込まれる。

ほどなく最初の一匹を釣り上げたギイは、ちよつとドヤ顔で私を見た。少しムカつとする。

くっ、私の本気見せちゃう！

その後、私とギイは合わせて30匹ほどの魚を釣り上げた。

「うわー、3匹負けた」

悔しさを滲ませてギイを見ると、フフンと言われた。

「しかし、釣り過ぎたか」

こんもり山盛りになった魚を見て呟く。

「大丈夫大丈夫ー」

さつきから腹ペコだった私は、上機嫌でそう返した。

昨日より小さくたき火をつくり、魚を枝に刺して焼く。

食欲をそそる匂い辺りを漂い始め、私とギイは揃って魚に手を出した。

また火傷をしないように、フーフーと冷ましてから魚にかぶりつく。

「おいひい」

皮がパリッとしていて、塩無しでも素材のおいしさで充分イケるね！  
しっぽの方が締まっててまたうまい。

食いきれるか？と言っていたギイもたくさん食べたので、魚はあつという間に無くなってしまった。

火の始末をしてから、ごろりと横になる。

昼時になってきたので、ぽかぽかとして暖かい。

あふ、と欠伸をすると、「寝るなよ」とギイから釘を刺された。

「らじゃーです！」

でも、満腹だし陽射しに包まれてるし……いかん、寝そう

意識を保つために、少し離れたところに座って川を眺めていたギイに話しかけた。

「ねーギイ」

ギイがこちらを向く。

「この世界に魔法って存在するの？」

そう、これはずっと気になっていた事だった。

だって、王道じゃないですか。

異世界といたら魔法！

水の眷属とか、光の性質とか！

「ああ、ある」

ギイはあつさりと言った。

「俺も多少は使えるが、やはり向き不向きがあるらしい」

「えっ、魔法使えるの！？見たい！」

超見たい。

しぶっていたギイだったが、私がうるさくせがむと承知してくれた。

「リア アルテ」

言葉と共に、ギイの右の手のひらに輝く球が浮かび上がる。

「ふおおおおおおおおおお」

ま ほ う だ

パネエエエ！！

目をキラキラさせている私に、ギイが「リツの世界には魔法が存在しないのか？」と訊いてきた。

「うん。少なくとも、私の知っている範囲では」

ちなみに、さっきの光の球はギイが言葉を唱えると消滅した。

「そうなのか」

興味なさそうに呟く彼に、私は上半身を起こしてしゃべりかける。

「私に魔法教えてくれない？」

「使えるようになりたい！そしてなりたい！」

「えー……」

もろに面倒くさそうな表情をしたが、目の輝きをパワーアップさせた私を見ると、ため息をひとつ吐いて腰を上げた。

「じゃあ、歩きながら」

「お願いします師匠！」

どこまでも付いていきます！

私は飛び跳ねたいような気持ちで、ギイに敬礼のポーズをとった

の  
だ  
っ  
た。

さかなはやっぱやきたい(後書き)

いつまでたっても町につかない・・・orz

ふぁんたじーにまほうはつきもの(前書き)

お気に入り登録、評価ありがとうございます！^^



ふぁんたじーにまほうはつきもの

川のせせらぎが、だんだんと遠ざかっていく。

歩を進めながら、ギイが口を開いた。

「魔法の使い方だが………」

待ってました！

隣りに並んで歩きながら、次の言葉を待つ。

「まず、自分の中の魔力を見つける」

そこでギイはいったん言葉を切り、ゆっくりと続けた。

「それには精神を集中させ、気を腹に溜めなくてはいけない」  
ほうほう。

なんか、武道みたいだな。

「すると体の中に温かなエネルギーの玉が現れる」

それが魔力だ、と彼は言った。

私は真剣に耳を傾け、聞き役に徹している。

「まあ、その魔力を見つけるのも一苦労なんだが………」

「へー、そうなんだ」

「ああ。で、そのエネルギーを魔法として発動させるために、言葉が必要になる」

詠唱ってやつですね！

「その言葉だが、真の意味を理解していなければ、ただ唱えても発動しない」

「ま、真の意味って？」

私は（こんな）。＊顔をしていたと思う。

ついに魔術発動の方法が！！

5歳の時から憧れてた、「魔女になる」という野望がアア！

「・・・・・・・・説明できない」

「へ？」

間抜けな声を漏らす。

例えば、と彼は話し始めた。

「俺がさつき使った「リア アルテ」って魔法があったらどう？あれは魔光球を生み出す言葉だ」

ランプよりも長持ちして、火傷することもない。

「だが、「リア アルテ」の真の意味を他人に説明することは誰にも出来ない。自分で悟るしかないんだ」

悟る、ですと。

「ぼんやりとしたイメージなら伝えることが出来るが、ピッタリの説明が思いつかない」

そう言った彼に、私は動揺しながら頼む。

「ぼ、ぼんやりでいいから、おお教えてくださいっ」

お願い師匠！

んー、とギイは顎に手をあてて考え込んだ。

「・・・・・・・・こう、ふわっとした感じで、ぼわんとした」

「ぼんやりにもほどがあるわ！」

ついツツコンでしまった。

ムツと眉を寄せるギイ。

「仕方ないだろ、出来ないんだから」

かつてアルフェニア国一と歌われた魔導師が、真の意味を言語化し、書物に記そうとした事があったらしい。

彼は十月十日研究室に籠った挙句、発狂したという。

「そのくらい難しいんだ」

フン、と鼻を鳴らすギイ。

「・・・・・・・・ちなみに、今の魔法についての説明と違って」

「俺に魔法を教えてくれた近所のじ さんの受け売り」

きっぱりと答えられた。

この人、自分の言葉で説明するのド下手くそだ！

思わず心の中で失礼なことを考える。

「じゃあ、魔物とかも存在してるの？」

「ああ、下級魔族なら結構いるな」

上級になるとそうそう姿を見掛けないらしい。

触らぬ神に祟りなしだね！まったくもって会いたくない。

「ちなみに、人間は魔族の魔法は使えない。発動条件が全く違うらしい」

その逆もまた然り。魔族に人間の魔法は使えないそうだ。

「へー」

今のも、おじいさんの受け売りなんだろうな……………。

そんなこんなで話を聞かせてもらい、日が暮れかける頃私達はレバノンへと到着したのだが。

「でっけー……………」

予想以上に大きな町だった。

なんか関所っぽい場所を通り抜け、うろつくと宿を探す。

夕暮れ時の町は、人々の活気ににぎわっていた。

声高に客引きをしている八百屋、何やら魔法のアイテムらしきものをかごに詰め込んで配る少女。

人の行きかう通りをいくつも通り抜ける。

「ここにしよう」

やがて、ギイが立ち止まったのはさほど繁盛も寂<sup>さび</sup>れてもいなさそうな宿だった。

「そういや、この町にどんくらい滞在するつもりなの？」

訊き忘れてたけど。

「2日の予定だ」

スタスタと宿の中に入っていく彼に遅れまいと私もくっついていく。

入ると、そこはこじんまりとした食堂のようだった。

「2日間の寝場所をお願いしたいのだが」

カウンターの奥で忙しそうに働いているおばちゃんに声をかける。

「あいよ、一部屋かい？」

おばちゃんは手を休めるとそう訊ねた。

「いや、二部屋だ」

「私は別に一部屋でもいいよ、金かかるし」

そう口を挟むと、ギイが溜息を吐いた。

「お前、一応女なんだからもっと警戒した方がいいぞ」

一応とはなんだ、一応とは。

口をへの字にすると、やりとりを聞いていたおばちゃんが豪快に笑いだした。

「面白い客が来たねえ。あたいの店は食堂も兼ねてるんだ、良かったら飯も食っていきな」

ふくよかな体を揺らして話しかけてくる。

「ありがとう」

笑顔で答える私の隣で、ギイがボソツと「…………二部屋は譲らないからな」と呟いた。

「あー美味しかった」

夕食を終え、私はベッドに飛び込んだ。

おばちゃんのご飯はとてとうまかった。素材のままも無論イケるが、やっぱり味付けされた料理を食べると生き返った気がする。

しばらくベッドの上でごろごろした後、シャワーを浴びに起き上がった。

シャワールームは下の階にあるので、借りたタオルと服を持って外に出る。

夕餉の時の食べっぷりがよかったせいか、気前よくおばちゃんが貸してくれたのだ。

2階から階段を下りていく途中でギイに会った。

黒髪がいつもより艶を帯びている、どうやらシャワーを浴びてきた後らしい。

「明日は市場に行つて、色々と物を調達する」

「ん、わかった。おやすみー」

「・・・・・・おやすみ」

向かったシャワー室は人気が無かった。元々女性客が少ない上に、時間帯が遅いせいだろう。

ちょっと熱めの湯で念入りに汚れを洗い流す。なんだかんだ言っても年頃の娘なので、汗や埃が気になっていたのだ。

「ふー」

頭をタオルで拭きながら階段を上がり、自分の部屋に向かう。

おばちゃんの貸してくれた服は、いい具合にゆったりとしていた。

再度ベッドに飛び込むと、仰向けになる。

「『精神を集中させ、気を腹に溜める』、かあ」

不意に昼間のギイの言葉が脳裏をよぎった。

「いっちょやってみますか」

グツとまぶたを閉じ、深く息を吸う。

腹に手をあてて、深呼吸を繰り返した。

すーはー。

すーはーすー。

・・・ぱちつ。

さつきと変わらず木の天井が見える。

「だああああ、出来ない！！」

堪え性が無いって言わないでくれ！寝オチしそうになるんだって。

「大体、異世界から来た人間はすごい魔力があるって設定じゃないのか」

ことごとく私の期待を裏切ってくれるな！

「ふん、もういいっ」

体にシーツを巻き付けて、くの字になった。

えーい、いじけてやる。

ゆっくりと目をつむると、眠気がやってくる。

ん？なんか、腹のあたりがみょーにあったかいよう、な……………。

何とも言えない違和感を感じたが、眠りに抗えず私は夢の中に引き込まれていった。

ふぁんたじーにまほうはつきもの（後書き）

11月16日、少し加筆しました。

## しょっぱんぐはねんいりに

次の日の朝、寝ぼけ眼をこすりながら下へ降りていくと、ギイは既に食堂に来ていた。

「おはよう………」

「おはよう」

灰色のシャツに黒いズボンの彼は、明瞭な声で返す。

「おはよう。よく眠れたかい？」

カウンターの向こうから話しかけてきたのは恰幅の良い宿のおかみさんだ。

「おはようございます。たっぷり寝れました」

ギイの向かいの席につき、おばちゃんの出してくれたお茶をすすめる。

うーん、熱いお茶が目覚めによく効くぜ。

その後、トーストとベーコンエッグをたいらげ（もちろん、とてもおいしかった）私達は市場へ向かった。

私は昨日のうちに宿で洗濯した制服姿である。まだちょっとしめつてるけど、大丈夫だ、問題ない！

日が高い時間帯だからだろうか、昨日街へ入ったときよりも人通りは少なかった。

それでも、市場に近づくとも賑やかな人の声や音楽が聞えてくる。

「はぐれるなよ」

市場の入口で、ギイが私に話しかけた。

「らぢやーです」

結構な数の人が行き交っているので、心配ご無用！とは言えないが、つていうか、私ガキ扱いされてね？

確かに、右も左もよく解つてないような感じだけどさっ。

……左右も解らないんじゃない、心配されるよな、うん。



「どうした？」

自問自答していた私の様子を不審に思ったのか、ギイが顔を覗き込む。

「あ、ううん。何でもない」

さあ、いざ行かん！

上機嫌で歩き始めた私の背後から、「俺を置いていくな！」という声がかかった。

「……………なあ」

「んー」

「まだなのか？」

「うーむむ」

疲れ切った気配の彼の言葉を聞きながら、私は悩みまくっていた。あの綿のシャツはあんまし出来が良くないし、フランネルっぽいのは色が派手すぎる。

「あ、これだ！」

いいもんみつけた。

「へえ、お嬢ちゃんお目が高いな」

疲れた様子のギイに、何故か憐れむような眼差しを注いでいた服屋のおっちゃんが私の方に向き直った。

私が生きているのは、きれいな萌葱色をしたトレーナーのような服である。

「ありがと。これいくら？」

「150リグってとこだ」

付け加えておくと、私達が泊まった宿は一泊350リグだ。ギイによると、ここら辺では相場より少し安いとのこと。

高すぎる、と私が文句を言おうとすると、ギイが「もう少し安くないか」と声を上げた。

「そうだなあ………。にーちゃんの苦勞に免じて、ここは100リグで」

「ありがたい」

どうやら商談成立のようである。苦勞つてなんだろう？

私も乙女の端くれなので、ちょおつとばかり買い物選別に時間がかかったかもしれないけど………。

せいぜい1、2時間である。

「もう少し早く選んでくれ」という彼の絞り出すような声に素直に従い、私はなるたけ急いで2、3枚のシャツとスポン、そして保温に優れたローブと頑丈な靴を買った。

「これで全部、か………」

夕暮れが近づき、鳥のさびしげな鳴き声が聞こえてくる。

「あー楽しかった!」

「よかったな」そう返すギイの声が暗い。

あ、大切なものを忘れてた。

「そういえば荷物を入れるザック、」

言った瞬間、深碧の瞳が深い悲しみを帯びたような気がした。

「……ギイに選んで欲しいなあ、なんて」

申し訳無さから、そう提案してみる。長々と買い物につき合わせたせいで、どうやら彼のHPは底を尽きかけているようだ。

「・・・・・・・・俺が？」

彼はきよんとした。

うん、と頷くと「だが、お前の氣に入るか解らないし・・・・・・・・」と困ったように返してくる。

「いいの。ギイが選んだのが欲しいんだから」

きつぱりとそう言つと、ますます驚いた表情になった。

「いいのか？」

「いいってば」

「解つた」

そう言つて、かすかに唇を笑みの形にした男に思わず見惚れる。ちよつと微笑んだくらいですごい破壊力だな！

ギイにくつついて旅グッズを売っているところへ向かうと、彼は中に入つて品物を眺め、ためらわずに一つを選び出した。

「これにしよう」

彼の手にはうるこの付いた革で出来たザックが握られている。

「えっ」

何の動物だろう・・・・・・・・思わず声がこぼれる。

「頑丈そうだろう」誇らしげなギイには悪いが、アレを持って旅するなんて・・・・・・・・私には出来ない！

「もーちよつとこう、違う感じのとかは？」

「じゃあ、これ」

選ばれたのは、ちつさい棘のいっぱい生えているザック。

「なんていうか、もう少しソフトな」

「これはどうだ？」

黒い光沢を放つ、なめらかな曲線を描くザック。

とある昆虫しか思い浮かびません。

「いやだあああ！」思わず涙目になる。

「俺が選んだのがいいって言つたじゃないか！」

「言つたけど、それだけは無理　！！」

「なっ・・・・・・・・、この光沢の何が悪い!？」

私とギイの不毛な言い争いが、市場の一角に響き渡ったのだった。

しょくたくはせんじょう？（前書き）

ちょっとシリアスな雰囲気を出そうと、頑張ってみましたが・・・

しょくたくはせんじょう？

あの後、店のおっちゃんに「お客さん、静かにしてください！」と怒られた私達はおとなくデニムのような生地で出来たザックを買い、すごすごと店を出た。

ちなみに買ったザックは、私がギイを上手く誘導して選ばせたものである。

ガスツ！とザックの山に手を突っ込んだ彼の指先には、私のお目当てのもの。

「あ！ギイそれ素敵！」

「え・・・・・・これか？」

「うん！さっすが、センスあるう！」ここぞとばかりに褒める。

「そうか？」ちよつと照れ気味のギイ。

「数あるザックの中からこれを見つけるなんて、只者じゃないっ」褒めすぎても怪しいので、やり過ぎないよう気を付けた。  
結果、ギイは機嫌よく会計台に向かっていく。

案外単純な奴かもしれない。と思った私だった。

宿へ向かう帰り道の途中、私はギイに素直にお礼を言った。

「何もかも買ってくれて、本当にありがとう」

今の私は一文なしなので、服や靴の代金は全部ギイの財布から出してもらったのである。

「いや、気にするな」

素っ気ない口調のギイ。

「そっぴや、どうやって稼いでるの？」

何となく傭兵かと思っていたのだが。

「村人に頼まれて、村を荒らす魔獣を退治したりしているへー。」

「あとは盗賊から巻き上げたり」

「……ん？」

何だか物騒な言葉が聞えたような。

「そうなんだー。すごいね」

りつは スル をつかった！

「 国を出る時に貰った金も残っているしな」

少し声のトーンを低くして呟かれた言葉。

え？と訊き返そうとしたら、彼は誤魔化すように「着いたぞ」と言った。

会話するうちに宿まで来ていたらしい。

さっさと中に入っていく背筋の伸びた後ろ姿を、私は黙って見つめた。

机に並べられた、ほかほかと湯気を立てている料理達。

「んー、おいしい！」

香草をふんだんに使ったステーキの肉汁が、じゅわっと口の中に広がった。

「……お前って旨そうに食うよな」

向かいの席に座っているギイが、少し呆れた調子で言う。

「だっておいしいし」

じゃがいも（つぼい）と茄子<sup>なす</sup>（らしき）をミートソースで絡めたの

を頼張りながら返事をする。

「ふーん」気の無い様子で返事をする彼の皿から、さっとソーセージをかつさらった。

「なっ」ギイが声を上げた時には、既にソーセージは私の口の中。

「ふひほひへるほーははふひほほ！」

「何言ってるかさっぱり解らん」

胸を張ってみせるとギイがハア、と軽く吐息をつき、次の瞬間彼のフォークがきらめいた。

「あっ！」

私の皿にあつたステーキがつ。

「ぐぬぬ………」

口元を拭<sup>ぬぐ</sup>って、ギイがニヤリと笑う。

様になつてんのがますますム力つく！

「小癪<sup>こしゃく</sup>な！こうなつたら目に物見せてやる！」

「さつきは不覚をとつたが、お前の手の内など丸見えだ」

キンッ、カカツ。

鋭くフォークを突き出すが、ことごとくギイのナイフに防がれる。  
ぬあああああ！

「ちよいとあんた達」

不意に、重量のある声が落ちてきた。

ビクッとして声の聞こえた方を向くと、仁王立ちで立っているおかみさん。

「……こ、恐い。」

手にしていたフォークがポロリと落ちる。

「子供じゃないんだから食べ物で遊ばない！！」

「すみません！」

落とされた雷に、私とギイの言葉はきれいにハモった。



「今日はよく怒られる日だったなー」

ボスツと音を立ててベッドに飛び乗ると、私は天井に向かって呟いた。

乾き切っていない黒髪が白いシーツに広がる。

私はフツと身体のを抜き、まぶたを閉じた。

魔力を探す練習である。

昨晚、眠りに落ちる寸前に何か感じた気がするようないような深く息を吸い、ゆっくりと吐く。

『温かなエネルギーの玉』かぁ……。

ふわふわしているものを、丸めるような感じだろうか。

取り留めのないことを考えながら、スウ、と息を吸った時だった。

ドクン

こきゅうができない。

辺りの空気が消失したかのようなだった。それと同時に、身体の下に感じていたベッドの気配が無くなる。

私は宙に放り出された。

「……………」

微かに空気を吸えるようになったが、声を上げようとしても喉が動かない。

目を見開いた筈なのに、景色は真っ暗でまぶたを閉じていた時と変

わらなかった。

何が、起きた？

落ちつけ、落ちつけ私。

必死に冷静さを保とうとしながら、トリップした時のように手足をバタバタさせてみる。

黒々と塗り潰された闇は何も変わらない。酸素が薄いせいかすぐに息が切れた。

突然、漆黒の中に声が生まれた。

「・・・・・・虚無の空間で生きている、か。流石は時の軸を飛び越えた者」

この暗闇よりも深く響く、冷え切った声。  
それが耳に届いた途端、意志と関係なく肌が粟あわた立った。

何だかよく解らないけど、すつごくまずい気がするうっう！

「汝が抱えし魔力は、我等の存在すら脅かす。悪いが封印させて貰おう」

クツと嗤った気配がした。

「封じ込めの威力で、死なねばよいがな」

「・・・・・・・・」

生命のピンチ・・・・・・・・だと？って私のバカそんなネタ振りまいてる場合じゃないだろって、

「っ！」

身体の中から何かが抜き取られていく様な感覚。

吹き荒れるような喪失感が私を襲った。

いやだ。

嫌だああああああ！！

必死に手を振り回し、脚を蹴りあげた。酸素が薄いなんて関係な

い、ただ必死に全身を使って抵抗する。

奪われたものの残滓を、身を擦って守る。  
制御出来ない感情の爆発が、周りを覆う晦冥<sup>かいめい</sup>を揺らしたような気がした。

「なに、を……！！？」

驚愕した叫びが聞こえ、深闇の声が低く呻いた。

行つて。向こうに、行け！

声が出せない分、頭の中で怒鳴る。

やがて、指の先から痺れていくのを感じ、私はぐったりとして意識を失った。

しょくたくはせんじょう？（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。お暇でしたら、感想など書いて頂けると嬉しいです^^

## たびはきままに

存在を・・・・・・・・やかす・・・・・・・・。

「うあああああ！！」

勢い余って掛け布団をふっ飛ばしながら、私は跳ね起きた。  
視線をうつろつろと彷徨さまよわせながら、呼吸を整えようとする。  
窓から洩れてくる爽やかな朝の光や、白いシャツが、私を落ちつか  
せた。

微かに震える手で胸元を押さえ、私は安堵の溜息を零した。

「夢・・・・・・・・？」

朝日に目を瞬しはたかせながら呟く。

なんかやたら厨二臭いせり、ふを・・・・・・・・って。

どんな、夢だった？

起きた瞬間まで鮮やかに残っていたはずの記憶が、不鮮明になっ  
ている。

えーっと。

何か真っ暗で・・・・・・・・。

うーむむ。

「まあいいか」

そんな事より朝ごはんだよね！

おばちゃんのご飯は最後までおいしかった。

宿の前で見送ってくれたおばちゃんにぶんぶんと手を振りつつ、私達はレバノンを後にする。

「これからどこに向かうの？」

街道に出て早速、私はギイに尋ねた。

ちなみに今の私の格好は動きやすいグレーのスボンに、麻で出来た長袖のシャツである。

この季節は朝昼が暖かいので、ローブは背中の中のザックの中。

「そうだな・・・どこがいいか」

返ってきたのは予想外の言葉だった。

「えっ、決まってるじゃないわけ？」

驚く私。

「ああ。別に目的地があるわけじゃないからな」

あっさりとギイが言う。

「じゃあ、もーちよつとレバノンに居てもよかったんじゃない？」  
「」

おかみさんの手料理に胃袋をがちり掴まれた私がそう呟くと。

「俺は世界をさすらう者。ひとつの場所に長く居続けることは出来ない」

ちよつぱり哀愁を演出させ、フツと笑うギイ。

お前はスナフオンか！とツツコみたいのを抑え、私は質問を重ねた。

「んじゃ、ここから近い街ってどんな所？」

「ちよつと待て」そう言うと彼はザックから地図を取り出した。

「セドという小さな村が西にあるな。あとは少し遠いが南のジオル

という街だ」

なんでも、ここ数年で急成長してきた街なのだそう。

「へええー」

美しい湖があるらしいと聞き、興味が湧く。

「ね、そこ行ってみようよ」

地図を広げたままのギイにそう提案する。

「そうだな」ギイの賛同を得た私は、やったー！と言いながら地図を覗き込んだ。

「意外と距離あるねー。そういや、都市みたいなのってあるの？」

「ああ。……ウィルフレア王都だ」

彼の長い指が、使いこまれた地図のある一点を指した。

そこには「2歳児が達筆っぽく頑張ってみました」的な文字が記されていた。

もちろん私が見たこともない、習ったこともない文字である。

だが。

「ねえ……これって何文字で書かれてる？」

「ファールド文字だが？」

そう、と私は小さく呟いた。

なんで読めるんだろう。

いや、読めたとは少し違う。知らない文字なのに、「解る」。

ギイのダークグリーンの目が訝しさを湛えて黒髪越しに私を見ていた事に気付き、何でもないと言を振った。

「じゃ、行こっか！」

元気よく歩き出そうとした途端、シャツの襟を掴まれる。

「ぐえ」と蛙の潰れたような声が出た。

「なにすんのさ、」

「囲まれている」

抗議しかけた私の言葉を、冷静なギイの声が遮った。

えっ、と辺りを見回すと、街道の脇の森から何やら不穏な気配。  
これが殺気というヤツかアア！  
元の場所でも似たような空気を感じた事はあったが……………比  
べ物にならない。

慎重に息をひそめていると、やがて木の影からのっそりとそいつ等  
は現れた。

シャ、シャ という呼吸音が聞える。

「 ギイ」

硬い声音で彼を呼ぶと。

「なんだ」 いたって平常心らしい返事が返ってきた。

「あれ、人ぢやないよね？」

ついでにいうと、動物でも無いですよね！

ぎらつく紫の牙。小熊くらいの体躯に、背中から生えた真つ黒な翼。

「ああ、魔獣だ」

アグデーモンの派生種だろうな、と言葉が続く。

あぐでーもん、とな。

私はごくりと唾を飲み込んだ。

神崎りっつ、異世界に来て初めての「魔獣とぉー、エンカウントッ  
」です。

……………嬉しくなああいい！！



たびはきままに（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！評価していただいた喜びで、ニヤニヤしてます（え

なにこともまずやってみる（前書き）

戦闘シーンがグロいかな？と感じたのでR15付けました。あはん  
うふんな展開は今のところ無いです。

なにこともまずやってみる

突然異世界に飛ばされてしまった少女、りつ。

彼女は無愛想な青年、（顔よし）と共に世界を周る旅に出ることに決めたが、突然街道で魔獣達に囲まれてしまった。  
可憐な女子高生、りつの運命やいかに！

「シャアア　ッ！」

口から涎《よだれ》を垂らしながら、灰色の毛で覆われた魔獣が叫ぶ。

現実から逃避していた私は、その唸り声でハッと我に返った。  
ああ、ナレーターに徹していたい……………。

「リッ」

遠い目をしながら「可憐より美少女の方が良いか？」と考えていた私は、ギイの真剣な声に彼の方を向いた。

20匹ほどのアグデーモン達は、警戒しながらじりじりと私達を包囲している最中だ。

何度考えても、コマンドが『逃げる』『殺される』『逃げられない』しかない！

つていうか後2つはコマンドですらないっ。

「な、なに？」

ちよっぴし声が震えたのは気のせいです、はい。

ギイがじつと私を見つめた。

薄い唇は真一文字に引かれ、一房の黒髪が頬に垂れかかっている。  
こんな状況でもドキッとする程イケメン、だが。

今の私にはマイナスイオン（美形のみが作り出すことの出来る空気清浄粒子）より、凍てつくような敵意のブリザードしか感じられない！

バカな事を考えながら、やや緊張気味にギイを見つめ返す。  
あれか、「ここは俺に任せてお前は先に行け！」とか？

魔獣から逃げきれぬ自信……ないな！。

混乱気味に思考していると、ギイがゆっくりと口を開いた。それと同時に左手が持ち上げられる。

「邪魔だからあっちに行つてろ」  
しっし、と振られる手。

！！

「きつ、傷ついたあー！」

うう、確かに役立たずだけどさ。

「あ、悪い。……けどお前戦えないし」

ぐさぐさと刺さる言葉の矢。

すっかりへこんだ私に、「突破口を作るから走れ」とギイは告げると、腰に差していた剣<sup>つるぎ</sup>を抜いた。

太陽の光に白刃が光り、アグデーモンが一層殺気立つ。

「行くぞ」

ギイが身を屈め、伸び上がった途端。

あつという間に彼の直線上にいた一匹と間合いを詰め、体を横真つ二つに斬り裂いた。

「リッ！」名を呼ばれ、弾けるようにして走る。

雄叫びをあげて近づいてくる魔獣の腕を間一髪で避け、私は森の中に走り込んだ。

ドキドキしている心臓を落ちつかせるため、深く深呼吸をする。追いかけてくる気配は感じられない。

そつと木の影から、ギイと魔獣達の様子を窺ってみると。

背の高いギイに群がる4、5匹のごつい体躯。

刃が一閃し、魔獣達は悲鳴をあげて地面に倒れ込んだ。

返す刀で一匹の体を切断し、青い鮮血が地面に飛び散る。

「ヴァトラ（炎弾）」

ギイのよく通る低い声と同時に、指から放たれたいくつかの火の玉が、3匹の胸に命中した。

「シャアアッ」

次々に倒されていく仲間を見て声を荒げ、襲い掛かるアグデーモン。彼は剣を上段で構えると見事に両断した。

・・・・・・T U E E E E !!

テレビで見たフェンシングや、兄貴の試合で見た剣道の知識くらいしか無いが、彼がかなりの使い手だということは理解できた。首を刎ね落とされ、動かなくなる魔獣。

殺さなければ殺される、それはかつて居た世界では存在しなかったルールだった。

返り血一滴吐いていないギイの姿に、改めて自分のいた世界との違いと自身の無力さを思い知らされる。

ほどなくして全てのアグデーモンが解体され、地面に転がった。たった一人で立つギイの手に握られた銀色の刀は、青い血で濡れて

いる。

刃を一振りすると、剣は抜く前と同じ曇りない輝きを放った。

「あっ、あの！」

私のおずおずとした言葉に振り向くギイ。

「助けて頂いてありがとうございましたっ」

両手を胸の前で組み、瞳をキラキラさせる。

「……何のつもりだ？」

ギイがやや引きつった表情で尋ねた。

「騎士に助けられた村娘の役」そう答えると、脱力して溜息を吐く。

「お前なあ、」

「うそ、本当に助かりました！ありがとうございます」

ポーズをやめて、素直にお礼を言う。

戦闘後のギイにどう接しようか迷った結果がこれである。いっそも考えない方がマシだった……。

恥ずかしさと気まずさを紛らわせるように、「こんなに魔獣ってうじゃうじゃいるものなの？」とギイに質問すると。

「いや、アグデーモンのような低級魔獣はあまり群れで行動しないんだが……」

ギイの返事はどこか歯切れが悪い。

「まあ、考えても仕方ない。それより、お前脚速いな」

「そーかな」首を傾げて曖昧に笑って見せる。

数か月前までは、自信を持って肯定出来ただろうけど。

「ああ。ピンチに陥った鼠みたいにすばしかった」

悪気はない（多分）ギイの言葉に、うぐぐ、と戦闘能力ゼロの私は唸る。

「わっ、私だって頑張れば……」

「ごによごによ。」

「そっぴや、魔力は見つかったか？」さらなるギイの追及に私は思

いつきり見栄を張った。

「もつちろん！」見つかつてない。

「なら、俺がさっき唱えた呪文を試してたらどうだ？」

そこはかとなくギイの笑みが黒いのは気のせいだろうか？

「ふんっ、やってやろうじゃん」

私は目をつむると、大きく深呼吸をした。

腹の中でエネルギーの玉を大きくするイメージを描く。

おお、なんかほかほかしてきた。

結構いいんじゃない？と調子に乗るが……力を魔法に転換するやり方がいまいち解らない。

さっきギイが使ったのは、指先からピンポン玉くらいの大きさの火が弾丸みたいに飛び出る魔法だった。

鮮明なその光景を思い返す。

えーと、確か呪文は……。

「ヴァトラ！」

目を開けて言葉を叫んだ瞬間。

ジュツと人差指から放たれた火弾が、ギイの真横を掠めた。

ちり、と艶のある黒髪が焦げる。

「……………」

固まっているギイ。

「……………」

わお。魔法発動しちった。

くおりていはきつとどりよくにひれいする(前書き)

更新遅くなつてすみません！



くおりにいはきつとどりよくにひれいする

空気の中に、かすかに焦げた匂いが混じる。

髪を焦がされた当人のギイは、さつきから微動だにしていなかった。私は黙り込んだままの彼を前に、何を口にすべきか頭を巡らせる。

「な………何で私にこんな力が………!?」………  
・・わざとらしいな。

「ククッ、我が闇の眷属より受け継ぎし秘力に、恐れ入ったと見えるな」いやいや、これ倒されるフラグ！完璧ダークサイド側の住人の発言だろ。

結局、口火を切ったのはギイだった。

「おおお前、魔法が!!」

ザザッと素早い身のこなしで詰め寄ってきたので、思わず逃げ腰になる。

「え、あっうんなんか使えた」

「軽いわ!」

すげーキレのいいツツコミありがとう。そんなスキルも持ってたんだね!

「ついに来たよチート!ふはははははは」ってな感じで内心テンションあがりまくりなのだが、たいして驚いていない風を装う私。

「どうやって使った？」  
「なんか、ギイが使ってたのを思い出して」  
「あー。まあ、皆そうやって魔法の使い方を憶えていくんだが」  
それにしても一発で出来るヤツなんて初めて見た、と感心したように言うギイに、私はドヤ顔をしないように表情筋を引き締めた。  
「．．．．．何笑ってるんだ？」  
「えっ」

それからギイは私にいくつか魔法を見せてくれた。  
「ドルグ土竜挾」

彼が地面に手をかざすと、ぼこぼこ土が挟れていく。

「やってみろ」

「ういさ！」

深呼吸をし、今見た光景を鮮やかなまま思い浮かべる。

「土竜挾！」

ぼこっ。

「．．．．．」

ほんのちよおっぴし、地面が凹へこんだ．．．．．気がする。

「ラテ次は水円盤。ラテ水性の攻撃魔法だ」

手のひらより少し大きい水の円盤が、すぐ近くに立っていた木の幹に突き刺さった。しばらくするとただの液体に戻ったが、木には挟られた傷がしっかり残っている。

よおし！今度こそっ。

「ラテラテ フィールドッ」

ひゅいん！

バシャツ。

水円盤が上空に吹っ飛び、数秒後私の頭に水が降りかかった。

「……つめたい」

思わずボソツと呟くと。

「っふ……っ、次いくか」

ちよ、今ギイさん笑いませんでした！？

その後も訓練は続いた。

セラハイデ  
「姿失蔽。姿隠しの魔法だ」

なんだか忍者くさい魔法を教えてもらったり。

スタツカス  
「惑魅、魔法をかけた相手を誘惑する」

「何に使うんだよ！」

訳の解らん魔法に、思わず突っ込んだり。

他にも治癒力を上げる詠唱や体力アップの魔法等、様々なものを教えてもらった。

そうして、片っぱしから魔法を唱えること約2時間後。

私は地面にへたり込んでいた。

ぜーは、と肩で荒く息をする。

「センスはかなりあるが……魔力はそこそこだな」

すぱっとギイにそう結論をだされ、「うぐ」と呻く。

そうなのだ。

ギイが唱えたのを真似すればたいがい魔法は発動したのだが、クオリティの低さがハンパなかった。

姿失蔽では、首から上だけ見えなくなったり。

光放は光の線が地面に激突した。

ついでにいうと、スタツカスは挑戦していない。

だってなんかイヤじゃん！

「おなかへった……」

「……」チラツと始末したアグデーモンを横目で見るギイ。

「絶対食べないかね？」

「意外とイケるかもしれない」好奇心の混じった表情でこっちを向く。

「試すなアア！」

こうして、私の「チートk t k r」。(。！)」という夢は幕を閉じたのであった……。

くおりていはきつとどりよくにひれいする(後書き)

テストが迫ってきているので、一旦更新が止まります。

再開は12月10日からになると思います。

どうぞ宜しくお願いしますm( ̄\_ ̄)m

たびはみちづれ、よはなさけ（前書き）

27日・・・だ？おかしい、私のカレンダーではまだ10  
日のはz（r y

・・・すみません更新大幅に遅れましたo y z  
待ってくださいていた方がいらしたら、本当に申し訳ありません！

たびはみちづれ、よはなさけ

「未知を恐れてはいけない、と思う」

「恐れるよ！確実にバッドエンドルートじゃん！」

っていうか、アグデーモン達の死体に誰も近寄って来ないのが、何よりもの証拠だと思う。

「ゴブリンはなかなかイケるらしいぞ」

「マジで！？」

『魔獣は食えるか』という議題で私とギイが争っていると、おずおずとした声が耳に届いた。

「あの………」

声のした方を見ると、街道から逸れた脇道から、ひとりの少女が出てくるところだった。

15、6の可愛い子で、ウェーブのかかった橙色の髪の毛を耳のあたりで揃えている。ぱっちりとした琥珀色の瞳は、不安そうに揺れていた。

「おお………なかなかの上玉ですぜ」

つい、某漫遊記ドラマの悪役のようなセリフを吐いてしまう。

少女はそれに構わず、再び口を開いた。

「北の方角はどこでしょうか？」

「え？えーっと、あっち」

ぴつと指で指し示す。

「ありがとうございます」彼女は礼を言って立ち去ろうとする。

「どこまで行くつもりだ？」

ギイが訝しげに口を開く。少女は着の身着のままで、荷物を持っていなかった。

「どこか遠いところ……ジオルから、なるだけ離れた場所へ」

振り向かないまま、彼女はそう返事をする。

「北へ向かって休まず歩いて、一番近い村まで三日はかかる」

彼女はビクツと反応すると足を止め、黙って項垂れた。

その疲れ切ったような背中に、私は問いかける。

「私達、ジオルへ行く途中なんだけど、何かあったの？」

「！行つてはいけません！」

彼女はこちらを向くと鋭い声で言った。琥珀の双眸が、今度は怖れを含んでいた。

「何があつたのか、教えてくれないか」

ギイが柔らかな声音でもう一度そう訊ねると、僅かな沈黙の後、少女はゆっくりと語り始めた。

ジオルの町では5年前に領主が急死し、代わって新しい領主が着任した。

その領主の政策で、畑ばかりだった街並みは、工場や煙突のある景色に変化していった。

工場で働く人数が足りないため、外から流れ込んできた労働者の他に、商売のチャンスを嗅ぎつけた商人達も現れた。

彼らは豪華な宝石や時計、珍品を売る他にいかがわしい風俗店も営んでいるとの噂だという。



少女はとつとつと言葉を漏らす。

「そのうちのひとつの店のある男が、私に絡んでくるようになって……」

彼女は亡くなった両親の後を継いで、ひとりで小さな薬草屋を切り盛りしていた。

その店はいわゆる裏通りとは離れたところにあつたのだが、ある時から黒いオーラを漂わせた屈強そうな男達が、店の前に居座り始めたのだという。

注意しても聞く耳を持たず、ガラの悪い男達を前に客足は減っていく。

困り果てていたところに、宝石店の商人が尋ねてきた。

「男は、店の前にたむろう男達をどうにかしてやると言いました」  
だが。

『あなたが私の妻になるのが条件だ』  
男がそう言って笑った瞬間、彼女はすべてを理解した。

「あの男が店の邪魔をしていたんです。それが嫌なら自分と結婚しろ、と」

少女は唇を噛んで、両手を握り締める。

リアル悪代官な展開に、私は彼女にそつと尋ねた。

「ちなみに、その商人の外見って」

「禿げかけて脂ぎったおっさんです」

「うあ（。台。）」

彼女は言葉を続けた。

「耐え切れなくなり、私は急いで街から逃げ出しました。でも男の仲間が放った魔獣の群れに追われて……」

「その男は、あんたを殺す気だったのか？」

ギイが驚いた様子で反応する。

確かに、一度妻にしようとした女性に魔獣をしかけるなんて、ゆかいなおっさんである。

すると彼女は微笑みながら言った。

「それは多分、私が彼をイスで気絶するまで殴ったからだと思います」

笑みが黒い！

「そ、そうか」ギイがぎこちなく視線を逸らす。

「はい、迷いなく振り下ろしたので結構出血してたんですけど、まあ正当防衛ですよ」

すっかり殺意を込めてたんですけど、足りなかったみたいです。とボソッとつけ足された言葉に、私とギイは固まった。

「とっ、とにかくこのままじゃ危険だね！」

いつまた魔獣が彼女を狙うかもわからないのだ。

「ええ、とりあえずマズイと思って街を飛び出したのですが、これから先どうすればいいのか」

うーん。

悪代官なおっさんを、一体どうすれば。

と、私の頭に名案がひらめいた。

「くっ………仕方がない、黄門様役はギイに譲るわ………」

「なんの話だ」

お銀さんは譲らないんだからっ。でもお風呂シーンはないよ！彼を無視して、私は彼女に優しく笑いかけた。

「私達と一緒に、ジオルへ行こう？」

「ですが………」戸惑う彼女の手をギュッと握りしめる。

「大丈夫。面倒くさいことは、全部まとめてこのギイが成敗してくれるわ！」

「お前じゃないのかよ！」

ギイのすばやいツツコみが、人気のない街道に響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3497y/>

---

GLUTTONS!

2011年12月27日23時46分発行